

2003.8.1

循環器・呼吸器病センター



だより
第20号

残暑の候、先生方におかれましては益々御清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、さる6月定例県議会において、当センターの結核病床100床を51床に変更する議案が可決されました。減少した49床は、これまでも利用されていなかったもので、これまでの診療体制を変更するものではありません。なお、本年度から病室の改修を行い、一般病床268床を変更しないで、個室の病室を増やすなどの環境改善を図る予定でございます。

今後とも御指導、御鞭撻の程、よろしくお願い致します。

病院長 堀江 俊伸

虚血性心疾患の治療について

循環器内科 医長 武藤 誠

PTCAは虚血性心疾患に対する血行再建術として、日本では1979年から始められました。PTCAには入院が短期間で済み、体への負担も少ないなど多くの利点がある一方で、PTCA後6ヶ月間に再狭窄が起こる可能性がありました。

これまで、この再狭窄の問題を克服するためステント、カッティングバルーン(かみそりのような刃をバルーンの表面につけたもの)、DCA(血管内の粥腫を削り取って回収する器具)、ロータブレーター(ドリルで血管表面の石灰化を削る器具)などのnew deviceとよばれるPTCA器具が開発されました。また再狭窄を予防するためにさまざまな薬剤の試験が行われました。このなかではステントのみに再狭窄減少効果が確認されましたが、その効果は血管径3.0mm以上でかつ病変長15mm以下の単純病変に限定されていました。このため、現在でも細い血管や長い病変を有する症例では、再狭窄は依然20~40%に見られています。

再狭窄は、バルーンの拡張により傷害された血管の治癒過程により出現することが指摘されていましたが、近年海外で、この治癒過程を抑える目的で表面にラパマイシンという免疫抑制剤を塗ったステントが開発されました。このステントの再狭窄予防効果は5%以下と劇的で、現在まで副作用も認められていません。再狭窄を克服するという長年の夢がかなえられつつあります。近々、日本でもこのステントが承認される予定です。

ラパマイシンステントにより、短期における虚血性心疾患の治療成績は著明に向上することが予想されますが、動脈硬化の進展を予防するという長期での治療の問題は依然残ると思います。当院でもPTCAで再狭窄なく経過した患者さんが数年後に狭心症、心筋梗塞を再発することは少なくありません。近縁の先生方の協力をいただき、高血圧、糖尿病、高コレステロール血症、肥満、喫煙といった動脈硬化因子のコントロールを積極的に行い、短期のみでなく長期的な見地で虚血性心疾患を治療していきたいと考えています。